

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

*レプソルド子午儀が平成23年度の国の重要文化財に指定

筆者は、20数年にわたって取り組んできた大型光学赤外線望遠鏡の建設に引き続き、開発に参加していたSolar-Bが打ち上げ成功で「ひので」と命名された時点で国立天文台を去るつもりであった。しかし、その後、国立天文台天文情報センターに広報普及員として残ることになった。その時点からそれまでの前を向いた先端科学を駆使した観測装置の開発研究から後ろを振り返って国立天文台に残された歴史的に貴重な観測装置、測定装置、



写真1

資料等をあさる仕事に没頭するようになった。そしてこの仕事にのめり込んだ原因になったというか、第1弾の仕事がこのレプソルド子午儀の発見であった。

レプソルド子午儀を発見と云うと「それは違うだろう」という方もまだ多いと思われる。確かにほんの十数年前まで、この望遠鏡の存在を知っていて、1995年頃の東京天文台に残すべき貴重な歴史的器物の調査があった際、子午線関係者から保存されるべきものとして申請された。その頃の調査委員会でランク付けがされた時、Aランクの第1位になっていた事実をこういった歴史的に重要な器物をあさり始めて知ったのである。この1995年頃文部省のなんとら審議会が国立大学に残る歴史的に貴重な資料の保存を勧告し、

東京大学、京都大学を始め多くの国立大学に博物館が設置され始めた頃の事である。しかし、国立天文台では調査が行われ、ランク付けまでなされたがそのまま放置されたようである。その頃の委員が定年退職の際、関係書類の入った封筒を筆者に届けてくれたのである。こういった調査の記録が捨てられなかっただけでも幸いであった。書き添えておくが1995年頃と云えば筆者は大型光学赤外線望遠鏡「すばる」建設のためにハワイで奮闘していた頃である。

筆者が天文情報センターで働き始めた頃、すでに常時公開を行っていた国立天文台の公開エリアの拡大に参画し、未公開であった施設を見回っていた際、レプソルド子午儀室がすでに使用されなくなって長く、荒れ果てて窓ガラスはすべて割られ、壊れかかった扉が

わずかに開いている隙間から中を覗いたことから始まったのである。壊れた扉の隙間から見えたものは、「ぼろきれ」を纏ったかなり大きな望遠鏡らしきものが突っ立っていたのである（写真1）。壊れかかった扉を開き、中に入りぼろきれをめくるとなんと真鍮製の大きな望遠鏡が現れた。これがレプソルド子午儀であった。このレプソルド子午儀は1880年にドイツで製作され、1881年に明治政府の海軍観象台が購入し、当時麻布にあった海軍観象台に置かれていた。1888年麻布の海軍観象台の地に東京天文台が発足した際、海軍観象台から東京天文台に移管された基幹望遠鏡の一つであった。麻布のレプソルド子午儀は時刻の決定と経度測量に使用されていた。レプソルド子午儀のあった位置は現在でも天文経緯度原点になっている。現在の年齢は131歳である。

明治の末期からすでに麻布の地は都市明かりが明るくなり、また狭隘な敷地のために1904年に購入したゴーチエ子午環を設置することさえできず、明治42年(1909年)には現在の三鷹の地を購入して移転する計画であった。ところが学者先生が麻布を離れて「ど田舎」の三鷹村に移ることに積極的でなかったうえに明治37~38年(1904~05年)の日露戦争に勝ったものの莫大な戦費で国力は疲弊しており、移転費用もままならずぐずぐずしているうちに大正12年(1923年)の関東大震災に見舞われたのであった。

関東大震災で当時麻布にあった東京天文台は壊滅的な被害を受け、大切な観測器械等を失ってしまったのであるが、レプソルド子午儀は運よく被害を免れ(筆者の想像であるが、移転のため梱包されていたのではないかと)三鷹に移転されてから、昭和10年(1935年)頃から月、大惑星、主要な小惑星の赤経の決定に使用され、その後、辻光之助によって恒星の赤経観測に使用され、日本で初めての本格的星表である「三鷹黄道帯星表」、「三鷹赤道帯星表」、「三鷹天頂帯星表」が出版されている。

三鷹で活躍したレプソルド子午儀も1950年頃役目を終え、その建物は不要物品の倉庫と化し、何十年もたつと倉庫はゴミの山となり、レプソルド子午儀はゴミに埋もれていたものであった。それを発見した筆者は猛然と片付けを始め、ゴミの山を片付けて行ったが、天文時関係の資料は捨てないで欲しいという要望もあり片付けは中途半端になったが、架台から外され東西反転器に載っていた望遠鏡を架台に戻し、建物の外観だけの見学対象であったレプソルド子午儀室の中も見学できるガラス室を設置した。こういったことはテレビニュース、新聞記事にもなった。

筆者は、天文情報センターで働き始めてまもなくこの望遠鏡を国の重要文化財に指定してもらおうと大風呂敷を広げた。それから4年、そしてこのたび平成23年度の国の重要文化財指定の答申が出されたのである。

写真2が、現在展示されているレプソルド子午儀である。筆者が発見した時、レプソルド子午儀の口径13.5cmの対物レンズは外されて行方不明であった。天文台では使われなくなった望遠鏡のレンズを新しい観測装置に転用されることは珍しくない。容易には行方は分からなかったが、太陽関係の資料を保管している棚で口径

13.5cm 焦点距離 214cm の「STEINHEIL IN MUNCHEN NR. 58999」というレンズを見つけた。

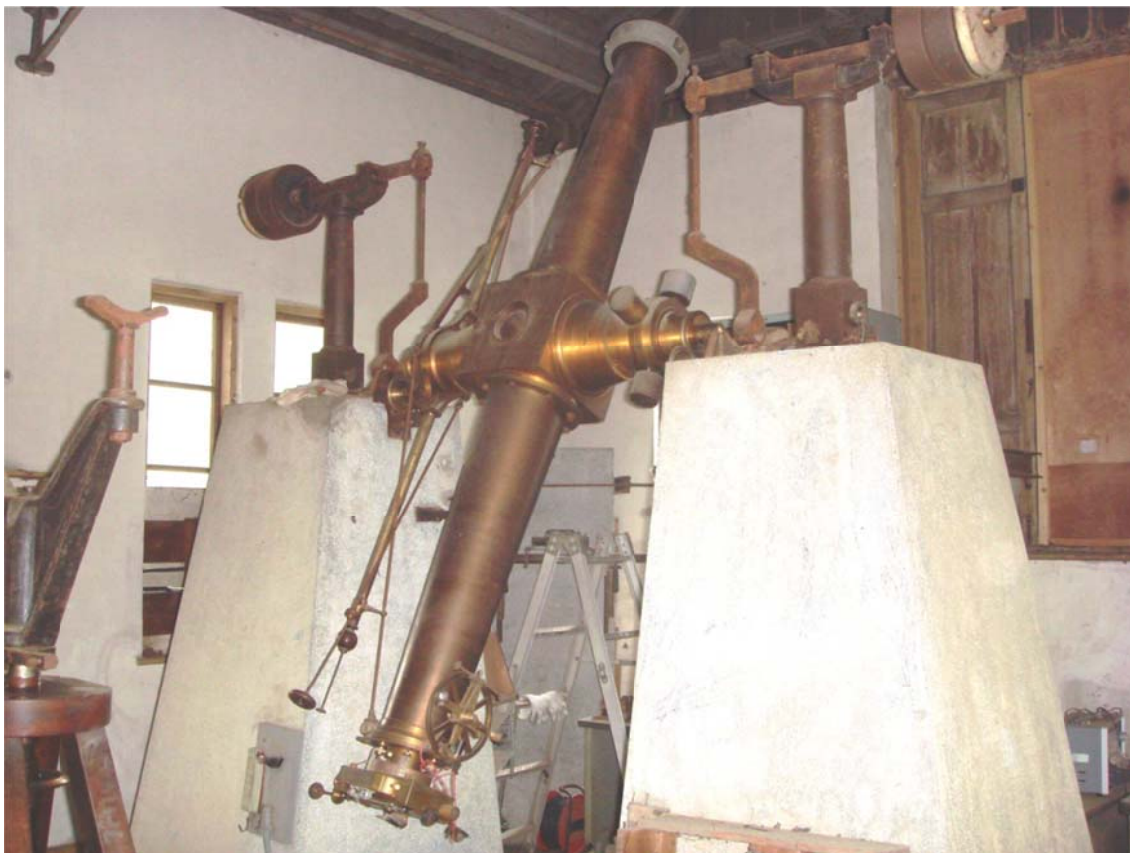


写真2 復元展示されたレプソルド子午儀

口径、焦点距離がレプソルド子午儀の対物レンズ（写真3）のそのものであった。望遠鏡にあてがってみると3本のビス穴もぴったりであった。レプソルド社は光学系にスタインハイルのレンズを用いる場合が多かったそうである。焦点部に多少の改造があるがほぼ原形をとどめていることが確認されている。このレプソルド子午儀の対物レンズ発見、検証については、アーカイブ室新聞 495 号に詳しい記事を書いた。



写真3 発見された口径 13.5mm の対物レンズ

今回重要文化財に指定されたのは次の4点である。

- 1) レプソルド子午儀本体 1基
- 2) 支持機構 1対
- 3) 南北の集心儀（視準望遠鏡：コリメーター）1対
- 4) 東西反転器具 1台

附属品として、水準器 1台

2)の集心儀という言葉は筆者にとって初めて聞く言葉であった。在野の天文学史研究家の佐藤利男氏から、集心儀とは何かと尋ねられ、子午儀と一緒に購入され1対と書かれているということから、筆者には視準望遠鏡：コリメーターとすぐに分かった。このレプソルド子午儀を海軍省が購入した時の公文書（写真4）が防衛省防衛研究所図書館に収蔵されていたのである。

これら、レプソルド子午儀を発掘、復元し、集心儀という言葉に出会った頃の事は、天文月報2008年3月号の「レプソルド子午儀・連合子午儀発掘・復元奮戦記」、天文月報2008年8月号の「集心儀という言葉（レプソルド子午儀復元余話）」に詳しい。

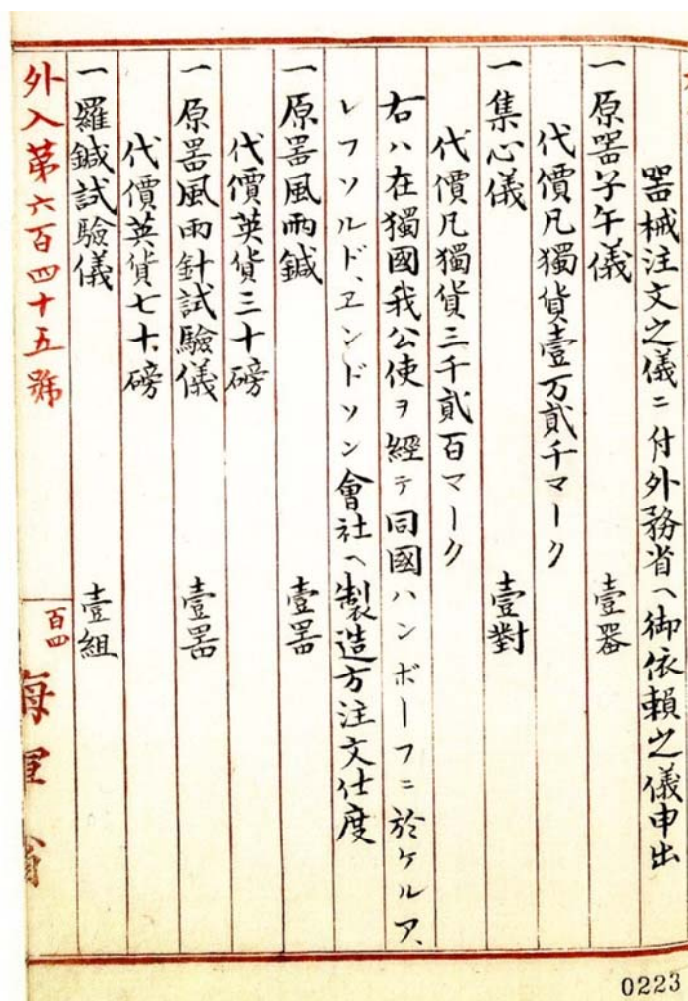


写真4 海軍省の購入依頼書

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp